

## はじめに

日々新しいニュースが報道され、とても追いついていけない。書きかけのメモが散乱しているが、考えをまとめる時間的・体力的余裕がない。現実が先行してしまっている。

そういうわけで、今回は生煮えの考えが多い。読者の方々のご了解を請う。

## 1 われわれは日常の感覚を失った

①東京都の感染者数は5000人を超えた。「8月中旬には1万人越え」の予測が繰り返されている。そんな状況でも、まだ五輪中心に報道を続けるNHK。大手マスメディア。彼らの神経はどうなっているのか。目の前の現実の、正しい評価ができなくなっている。コロナ慣れして感覚が麻痺している。異常感覚に陥っている。わたしも自戒しなければ。

②太平洋戦争中の人々の感覚も、こんな風だったのだろうか。異常な現実が続くと、それが当たり前のような感じがする。あまりにも圧倒的な現実直面して、われわれは平常心をとくに失っている。(8月5日記す)

## 2 未曾有の危険の正体は<sup>トリレンマ</sup>三重苦

①今までコロナについては、未知の脅威だとか、人間相手とは違うアプローチが必要だとか、テールリスクだとか、断片的に述べてきた。

ここで簡単に、コロナ禍の意味合いをまとめておきたい。

②コロナ禍は3つの特徴をもつ。それが、一過性の災害と大きく異なる。

(1) 未知の相手であること。

→ 経験も感覚も役立たない。コロナウィルスが、今後どのように変異するか予測不能である。

(2) 自然が相手であること。

→ 人間の思いや感情は全く通じない。ウィルスはウィルス独自の論理で拡大する。経済再生は大切だが、それは人間の事情にすぎない。感染抑止を最優先しなければ、コロナ禍は終息しない。

(3) テールリスクであること。

→ 単に未曾有の損害をもたらす危険があるだけでなく、将来にわたり継続反復する可能性が高い。

③以上のどれ1つをとっても、大変なリスクである。

コロナ禍は、未知、自然相手、テールリスクという3つが重なった底知れない脅威である。

その意味合いは、現在進行中なだけに、容易に想像しがたい。

④特に、人間相手の権力闘争を生き抜いてきた政治家には、「未知の自然」のリスクは理解できない。だから、古来、権力者にとって天変地異は鬼門だった。

彼らの思考パターンは、人間相手と違い、自然相手には全く通じないからである。いや、むしろ、人間相手に通用していた手法が、自然を相手にするときの障害となる。

⑤コロナは近い将来収束するのか？ それとも、次々と変異株が現れ収束は当分見通せないのか。

わたしは昨年10月に、コロナ禍の収束に至る3つのシナリオ（楽観的、中間的、悲観的シナリオ）に言及した（本メモ（4）6 ②参照）。その中の悲観的シナリオでこう述べた。

（政府は）感染爆発の予兆を見逃がして都市封鎖が遅れ、回復に数年から10年を要する被害を社会/国民生活にもたらす。

⑥しかし、今となっては、悲観的シナリオさえ不十分かもしれない。

現政権は感染爆発の予兆をとっくに見逃したし、都市封鎖はまだまだ見通せない。

何より菅政権は国民から信用されていないから、厳格なロックダウン法制は導入できない。そうこうしているうち、時は無為のうちに過ぎ去り、コロナは熾烈化する。

⑦そうすると、（以前わたしが予想した3つのシナリオを超える）「超悲観的シナリオ」を加えるべきかもしれない。

それは「一定の感染者と死者が出る事を容認し、社会生活を回していく」シナリオである。

犠牲者を出しても経済を回していく、いわば恐怖のシナリオである。

⑧「一定の感染者」といってもそれは言葉のあやに過ぎない。人は感染を制御できないから、感染者数は無限定に拡大する。

嫌な言葉だが、上層階級は感染しても手厚い治療を受け、下層階級は見捨てられる。そんなおぞましい格差社会である。恐怖のシナリオの結果は、非人間的結末である。

### 3 「コロナ禍の中の五輪」をどう評価するか

①一部の報道に、今回の五輪をどう捉えるかは、「歴史的の評価に委ねる」というものがあった。おかしい考えである。

②「後になれば、一時的な熱狂から覚めて正確な評価ができる」とは幻想である。

同時代の人しか分からない真実がある。この真実は時がたつにつれ消えていく。

後になればなるほど、真実は曖昧になる。

③いつの時代でも、権力者は自分の意向に沿った情報を、大量に流し続ける。

歴史に残る記録の多くはこういった情報である。弱者や少数者の意見は、やがて情報の海の中に埋もれてしまう。

そうならない様に、われわれは今現在、「同時代に生きた真実」を記録し続けなければならない。

(8月8日、五輪閉会式の日に記す)

### 4 健全な判断力を失った五輪報道

①東京オリンピックが終わる。8月6日、国内の感染者は累計100万人を超えた。

コロナが猛威を振るう中で、NHKは五輪報道一色に終始した。日本中が「一致団結日の丸弁当」でよいのか。

②NHKのテレビ報道は、まだ世論に与える影響が大きい。それなのに、無自覚か意図的かは別として、節操を欠く報道を続けた。コロナ禍の惨状には目をつぶり、祭典に浮かれるアンバランスな報道ぶりだった。

③その間、取り残された問題は山積している。

(1) コロナに悩む患者や家族の支援

(2) 明日の生活にも苦しむ貧困層や弱者の救済

(3) 未だワクチン接種を受けられない人々の不安/苦しみへの対応

(4) 職域接種という特権的接種の是正(未組織労働者は機会を与えられない不公正/不平等)。

(5) 深刻な後遺症問題の実態解明。

④首相が五輪を起爆剤として、政権支持率の上昇を狙った事はつとに知られている。

NHK は政権の「パンとサーカス（娯楽）策」（後述 8）にまんまと乗せられた。

コロナ禍の真只中にも拘わらず、NHK は率先してサーカス（娯楽）を提供し続けた。偶然ではない。菅首相が五輪の盛り上がり期待したのと、軌を一にする。NHK の今回の報道は意図的なものに違いない。

首相の目論見は、急速な感染拡大で半ば潰えたが、それだけに、NHK の判断ミスを際立たせる結果になった。

⑤福沢諭吉は、かつて「政府の過ちは、それを見逃す民衆の無智に支えられている」と見抜いた。

一国の暴政は必ずしも暴君暴吏の所為のみにあらず、その実は人民の無智をも

って自ら招く禍なり（『学問のすすめ』）。

⑥福沢のいう「暴政は暴君暴吏のせいだけではない」という指摘は、示唆的である。

NHK の五輪報道は、悲惨な現実を無視し、一時の饗宴にハイライトをあて続けた。

結果的に、政府の無為無策を覆い隠す役目を果たした。NHK は政府でも官僚でもないが、実質的に彼らの利益になる方向で動いた。

⑦当然ながら、内部では五輪一色の方針に反対する意見があったであろう。そうでなければ、NHK の矜持も知的レベルもあったものではない。憶測にすぎないが、反対意見は上からの圧力で潰されたか。

⑧今回の報道ぶりで、NHK の古い体質があぶり出された。

まるで誘蛾灯に吸い寄せられる蛾のように、目の前の現実につまわれ、全体を俯瞰することができない。五輪を評価/位置づけをしようとする視点がない。それを異様とも思わない。

感覚が麻痺している。健全な判断力を失っている。不気味な足音がヒタヒタと迫る。

（8 月 8 日、五輪閉会の日記に記す）

## 5 「結果よければすべてよし」は間違い

①記者会見での菅首相の発言。

東京の繁華街の人流は、開幕前と比べて増えていない。五輪が感染拡大につながっているという考え方はしていない。

だが、この発言はいつものポジショントーク。

五輪開催と感染拡大の関係は、すぐには分からない。選手たちが帰国してしばらくしてから初めて明らかになる。

来日関係者の交流の結果、日本で流行中の「インド株」がどのような変異を遂げるかはかは、今後の経過を見なければ分からない。結果は神のみぞ知る。

②羽田空港に到着した 30 代の女性から、中南米で猛威を振るう「ラムダ株」が検出された。女性が到着したのは 7 月 20 日だが、その事実は 8 月 7 日になりはじめて報道された。偶然にも、閉会式の前日である。遺伝子の解析に時間がかかったらしいが、疑わしい。

③ラムダ株検出の意味は重い。たとえ感染者は 1 人でも、新たな変異株が日本に持ち込まれれば、破滅的結果をもたらし得る。それが、新たな変異株が持ち込まれることの恐ろしさである。五輪開催は、その危険性を高めた。

④7 月 26 日に、英国の非常時科学諮問委員会 (SAGE) は「今のワクチンが効かない変異ウイルスが出現するのはほぼ確実」とする報告書を発表した (2021 年 8 月 7 日付朝日新聞)。

「結果よければ全てよし」という古い日本的な考えを改めなければ、今後も次々と日本を襲う変異株の危機に対処できない。

⑤そもそも、「五輪が感染拡大につながるか否か」という問題の立て方が間違っている。ポイントは、「五輪開催は（破滅的結果をもたらす）リスク（危険・恐れ）があるかどうか」である。その恐れがあれば、たとえ発生確率は低くても、中止するのがまっとうな判断である。

⑥平時には、裏付けや根拠が必要な場面がしばしばある。

だが、非常時には、エビデンスはいらない。将来のことを予測するのに、エビデンスなどあるはずもない。リスクがあるかどうかこそが問題の本質である。

日本は戦略の立案や判断に際してエビデンス（裏付け）のある情報を重視するが、経済安全保障におけるインテリジェンスの考え方が違う。

事実や憶測、噂を含めた情報を基に不透明な未来に判断を下すのがインテリジェンスだ（ルール形成戦略研究所 (CRS) 所長・国分俊文多摩大院教授。2021 年 4 月 18 日日本経済新聞）。

⑦危機管理にあたっては、(国民の生命・健康を害する) 危険を犯すこと自体が暴挙。国民の総意もなく、そんなバクチに賭けること自体為政者として失格である。

テールリスクという巨大な危険を前にして、「安全安心な五輪」を保証するのは神の御業<sup>みわざ</sup>である。人間業ではない。どうやら菅首相もバッハ会長も、人間を超越しているらしい。

(8月7日記す)

## 6 わたしの「考える三手順」

①日本人は、合理的/論理的思考が苦手である。デカルトの『方法序説』のように、物事を考えるのに考える方法が必要だという意識がない。

場の空気やムードで同じ方向に動き、確たる根拠もなく、上席の者の意向が場の雰囲気支配する。知識と経験に頼って、感覚的に結論を出してしまう。考える手順を端折ってしまう。だから、結論に至った理由を、筋道を立てて、他人に説明することができない。

②わたしは、よいアイデアが浮かんでも、すぐ判断を下さない。必ず「考える三手順」を踏んでから判断する。

頭に浮かんだ考えは、泡のようなものだから、論理のフィルターを通した後に判断する必要がある。どんな状況にあっても、目の前の現実に関わされず、理詰めで考えることにしている。

③われわれは何のために考えるのか？ それは問題の解を得るためである。

よい解決策を得るためには、状況の全体を知らなくてはならず、全体を知るためには、情報を集めなくてはならない。

わたしの「考える手順」の概要：

**情報を集める→全体を俯瞰する→解決策（選択肢）を発想する**

④各手順のポイントは以下の通り。

### (1) 情報を集める（第一手順）

ポイントは自分にとって不都合な情報（マイナス情報）を集めること。不快な情報、反対意見、異端の考えなどを重点に集める。

マイナス情報ほど有益なものはない。ところはほとんどのトップは、それを毛嫌いする。だから耳障りのよい情報ばかり上がってくる。

広く深く情報を集めることができるか否かは、当人の器にかかっている。

## (2) 全体を俯瞰する（第二手順）

目前の現実から距離をおき、高みに立って全体を俯瞰すること。距離の取り方によって密着型、半身型、俯瞰型がある。日本人には密着型が多く、状況に振り回され易いから要注意（いわゆる「局所最善、結果最悪」）。

高所から俯瞰するだけでなく、短期・中期・長期の時間軸で考えることも必須である。日本人の最も不得意とするところである。

## (3) 解決策を発想する（第三手順）

最低3つの質の違った選択肢を創りだすこと。極論やラジカルな発想も、ブレインストーミングの過程では、排除しない。

しかし、決定打とか究極策などの代替案がない解決策はいかがわしい。

いわゆるプランBだけでなく、プランCを準備するのが、「考え上手」の秘訣である。

⑤ここで、「全体を俯瞰する」重要さについて付言する。

われわれはふだん地べた(=現実)に密着して景色を見ている。ビルの5階から見れば、景色はかなり違って見える。10階から見る景色は全く違う。これが、人によって判断が異なる理由の1つである。

同じ景色を見ているつもりでも、視点の高低によって見え方は異なる。現実を正確に評価するためには、地べたを離れ、高みに立って、全体を俯瞰しなければならない。

⑥政府のコロナ対策の失敗の原因はどこにあったのか、「考える三手順」に照らし、簡単に考えてみる。

以下では、分かりやすい3つの例を検討する。

(注) このほかにも、第五波の感染爆発の対処遅れ、外出制限/地域封鎖策の逡巡、ワクチン獲得の遅れなど、政権の失敗は目白押しだが、これらの検討は他日を期したい。

## ⑦五輪1年延期の判断ミス

昨年、五輪の1年延期を主導した、安倍首相の判断は、完全な間違いだった。

「ワクチンの開発は間に合う」というのは、安易な思い込みである。当時の状況に照らしてさえ、その判断の合理的根拠はない。

- (1) 昨年(2020年)夏に、五輪・パラリンピックの1年延期を決定したのは、当時の安倍首相である。2年延期や中止などの反対論があるなか、ほとんど独断で決定した。
- (2) 「ワクチンは早ければ(昨年の)年末くらいに接種できるかもしれない」というのが、安倍首相の判断の根拠だったらしい。側近から都合のよい情報だけを聞き、マイナス情報に耳をふさいだのであろう。それに、ワクチンの効果を過大評価している。ワクチンは万能薬ではない。
- (3) 楽観バイアスの典型である。偏った情報に基づき、また、ワクチンの評価(位置づけ)を誤った。第一手順/第二手順とも端折っているから、結論も一本道である。多数の選択肢の中から決めた様子はない。  
要するに、はじめから結論ありきである。権力者の陥りやすい罠である。

#### ⑧両立論を見直す

- (1) 当初わたしは、経済の再建と感染拡大防止を目指す両立論を、さほど疑ってはいなかった。だが、両立論と称しながら、実質は経済の再建を優先する政府/経済界の姿勢に、しだいに疑問を抱くようになる。
- (2) そこで、両立論に反対する情報(当時のわたしにとっては「マイナス情報」)に意識的に注意していると、海外から「両立論を否定し感染拡大防止を最優先とする」論説が入ってきた。  
感染レベルを低く抑え、その後に経済再開をしたほうが、結果的に早く復興するといふのである。この俯瞰的視点は、十分に説得的だった。  
こうして、「感染拡大抑止後の経済復興」という、新しい選択肢が見えきた。
- (3) こういう経過あって、昨年7月の本メモ(1)で、わたしは両立論に対し疑問を投げかけ、同年10月の本メモ(4)では「感染拡大防止」と「経済再開」は両立しないと断定した。
- (4) わたしでさえ、早い段階で両立論の限界を見極めることができた。それなのに、大量の情報を持っているはずの政府が、どうして間違えるのか。
- (5) おそらくマイナス情報を嫌う事と、木を見て森を見ないからであろう。第一手順と第二手順を踏まないから、両立論という選択肢しか見えない。



この一件は、わたしにとっても、考える手順を踏むことの大切さを、改めて痛感させた。

#### ⑨Go to キャンペーンの愚行

- (1) 昨年夏に政治主導で始まった、Go to キャンペーンの間違ひは、当初から明らかだった。人出(人流)が増えれば、感染者は増える。個人の三密対策で感染拡大を防げるわけではない。昨年7月の本メモ(1)で、わたしは即刻中止を主張している。
- (2) ところが、経済界や首都圏の1部の知事までが、Go to キャンペーンに賛同した(この知事は、マスコミによく露出して、今では精力的に外出自粛を強調している！)
- (3) 大手マスコミも、「Go to キャンペーンが感染者増加につながるエビデンスがない」という政府の説明を、垂れ流すだけ。この点は本メモで再三批判したので繰り返さないが、目先の短期的利益に惑わされ、長期の時間軸で全体を俯瞰できなかった判断ミスの典型である。

⑩反対意見を聞き、状況の全体を俯瞰し、多数の選択肢の中から最終案を決めれば、これらのミスは容易に避けられた。実際、わたしのように公開情報しか知らない者にとっても、政府の判断は稚拙極まりないものだった。

#### 7 ロックダウンをどのように規制するか？

①外出自粛とか営業自粛とか時短要請とか、いくら対策をしても、コロナは拡大するばかり。根本的な考え方が間違っている。今までのありきたりの対策では、コロナは制御できない。それがはっきりしているのに、政府は相変わらずワンパターンの手法をとり続けている。対策はいつも後手・小出し・優柔不断。

②目先の対応(=戦術)をいくら頑張っても、戦略が悪ければ負ける。戦術は戦略のミスをカバーできない。それが戦争論の常識である。神風を期待するのは愚者の特徴である。

③最近、再びロックダウン(都市封鎖)の話が出始めたが、政府は煮え切らない。

「私権の制限は日本の社会にはなじまない」という。

(注) もっとも、これを機会に憲法を改正しようとか、私権制限の常態化を狙う旧体制派がいるから、政府の姿勢も単なるポーズに過ぎないと疑う必要がある。これは杞憂ではない。安倍/菅政権は、「法の支配」を逸脱する強行手段を弄してきたからである（例えば黒川事件につき、フラグメンツ第1回⑦参照）。

④欧米では「私権の制限」はもっと深刻な問題である。市民革命を経験した欧州は、私権の制限に敏感である。

そういう風土の中で、突き詰めて議論し、反対派の意見を取り入れ、明確な法規制まで持っていく。そういうギリギリの判断がロックダウン議論のベースにある。

⑤わたしは外出制限、地域封鎖、場合によっては都市封鎖（ロックダウン）が必要だと繰り返し述べてきた（例えば、昨年8月には、本メモ（2）7④⑤で外出制限/交通制限/都市封鎖が必要だと述べた）。

⑥何を今更の感があるが、地域封鎖・都市封鎖で人の流れを制限するのが、今残された実効的な感染抑止策であろう。ワクチンの接種は、感染抑止にはとても間に合わない。政府は幻想をふり撒くべきではない。

⑦ロックダウンに反対する人々は、緊急法制が乱用される危険を指摘する。その通りである。だからその危険を摘むために、徹底的な時限立法化が必要である。今までの時限立法は、その危険性を指摘する野党の意見を形だけ取り入れて、国会の附帯決議などでお茶を濁す事が多かった。附帯決議などは何の歯止めにもならない。

⑧厳格な時限立法を与野党で合意し、早急に地域封鎖・都市封鎖策を実施すべきである。ちょっと考えるだけでも、問題は多岐に渡る。

- (1) 期限到来による時限立法の自動失効と潜脱行為の禁止
- (2) 行政府へ委任の禁止と国会によるコントロール
- (3) 濫用監視のための独立の第三者委員会の設置
- (4) 政府/行政による違法行為の即時差し止め手続き
- (5) 私権を制限される人々への補償

⑨こう考えると、到底今の内閣でできるところではない。

これも既に指摘したところだが、与野党一致で一種の救国内閣を作り、事にあたらなければ

限定的な地域封鎖さえ出来ないだろう（昨年 8 月に救国内閣の必要性について言及した。本メモ（2）7④⑤参照）。

⑩救国内閣がだめでも、少なくとも与野党の政策協定を結び、一致してコロナ対策に当たってほしい。政党間の協約だけで信用できないなら、「五箇条の御誓文」スタイルの簡明な声明を国民向けに発表し、与野党一致でその履行を国民に約束する（「国民との協約」）。こうして与野党間の不信を取り除き合意を形成する。

コロナ禍はそれほどの重大事である。

（8 月 5 日記す）

## 8 菅政権の本質は霸道にある

①マキャベリの『君主論』に次の一節がある。

君主は愛されるよりも、恐れられる方がはるかに安全である。

②菅首相はこのフレーズが好きらしい。自らの強いリーダー像を重ねているようである。こうも公言している。

（わたしは）官僚たちに「強く指示」することがよくあるために、霞が関からはずいぶん恐れられているようですが、それも仕方がないと思っています。

③だが、首相の『君主論』への思い入れは、全くの筋違い。

マキャベリは、決して全面的に権謀術数を認めたわけではない。当時のイタリアは国家存亡の危機にあった。彼は、祖国を崩壊から救うための一時的方便として、このような君主の存在を認めた。首相のような解釈は『君主論』の曲解である。

実際、マキャベリは「民衆は君主より賢明である」とさえ述べている（『政略論』）。

④だから、マキャベリは祖国が統一された後は、有害な君主は退くべきであるという。彼の主張は激烈である。

美德や、学問や、その他の技能を敵視する暴君は、呪われるべき存在である。（中略）彼らは無能で卑劣と呼ぶに値する（『政略論』）。

「祖国を統一した者といえども、邪悪な君主に墮落した場合は殺す外はない」と彼は主張する。あたかも君主暗殺を是認するかのような、きわどい主張である。（ミネルヴァのふくろ

う 直視するリアリストたち(2) 3 ページ参照)。

⑤だが、こんな講釈は、首相にとってはどうでもよいこと。いわゆるマキャベリストを自認して、自分を大きく見せ、相手に心理的圧力をかけるのが、首相の真の狙いらしい。

⑥だから、政権維持のためには、なりふり構わない。コロナの感染急拡大には目をつぶり、五輪を盛り上げ、政権支持率の回復を狙う。そんな話が頻繁に聞こえてくる。

曰く：

五輪さえ開けば大衆のムードは変わる。実際に始まれば選手のエピソードや活躍に世論は盛り上がる。今反対していても、すぐに忘れて熱狂するはずだ・・・。

⑦どこかで聞いた話である。そう、古代ローマの「パンとサーカス」の話である。古代ローマ市民は、国家から食糧(パン)と娯楽(サーカス)を与えられて満足し、政治には無関心だった。その様子を詩人ユウェリナスが愚民政策の象徴として皮肉った。(デジタル大辞泉)。

(注)サーカスとは、複数頭立ての戦車競走を行った、競馬場のことである(ウィキペディア)。

⑧一言でいえば、首相の本音は庶民の蔑視/愚民視だろう。

庶民は愚かだから、喉元を過ぎれば次の話題に移る。それまでの間は、のらりくらりとやり過ぎ言質は与えない。責任は決してとらない。安倍政権から承継した遺産(!)である。

マキャベリが、究極で庶民を信じたのとは、大違いである。

⑨こうしてみると、菅政権の本質は覇道にあると分かる。

覇道とは「仁徳によらず、武力・権力・謀略によって天下を支配する政治のやり方」をいう(新明解国語辞典七)。

覇道を旨とする権力者には、権力からすべり落ちることへの恐怖と隠れたコンプレックスがある。それが逆に権力への執念となって現れる。古今東西の先例の示すところである。

⑩現政権のやり方を許容していたら、「トランプの共和党」と同じである。

自民党はさらに劣化し、退潮が続くだろう。日本の将来にとっても、政権中枢と自民党のガラガラポンが必要である。残された時間はない。

(8月7日記す)